

自立した登山者の育成が急務

安心を国語辞書で引くと、「心配のないこと」とあり、安全は「危なくないこと」とある。「ご安心下さい」という用語はあるが、「ご安全下さい」という用語はない。ということで「安全登山」という言葉を考えてみた。安全登山とは「危なくない登山を心がけよう」ということになるだろう。安心登山は「心配のない登山を心がけよう」ということになる。

しかし、登山はリスクなものである。絶対安全という保証はどこにもない。安全登山というのは願望であって、具体的な行動ではない。万里の長城の遭難事故を例に挙げるまでもなく、「安全登山」を標語として振りかざしていても、メンバーの一人一人に対して具体的な行動のアドバイスがないから、遭難防止に実効がないのだ。実効があるのは、「安心登山」であろう。

今年の 2 月に東京新聞から上梓された『安心登山の技法』の著者、洞井孝雄さんは本のタイトルを「安全」ではなく「安心」としたことについて、以下のように説明している。

「安全」とは「危なくないこと」をいうが、山の高低難易に関わらず登山は常に危険と背中合わせであり、それを続けていく以上「危なくないところ」はないし、「危なくないこと」もない。相手は自然、何が起こるか分からない。登山のスキルを上げることはもちろんだが、最終的には、登山という行為をおこなう人間の意識や姿勢こそが安全につながる。そのことを理解した上で、自然の中へ踏み込んでいくことができれば、登山する人も、その人たちを送り出す側も、彼らを迎え入れる側の人たちも、余計な心配や神経をとがらせずに済む。「安心」な登山というのは、そういうことだと思っているからである——と。

安心な登山を心がければ、安全登山になるということだ。ぼくは無名山塾を誕生させた当初から安心登山ということを考えていて、「安心登山の 10ヶ条」を掲げてきた。これは、NHK 教育テレビ番組『中高年のための登山学』の中でも、アピールさせて貰った。

- | | |
|----------------|------------------|
| ① 家族の理解を得ておく。 | ⑥ 計画を万全にしておく。 |
| ② 装備・服装を整えておく。 | ⑦ いい仲間を身近に育てる。 |
| ③ 体力を養成しておく。 | ⑧ リーダーシップが発揮できる。 |
| ④ 技術を習得しておく。 | ⑨ メンバーシップが発揮できる。 |
| ⑤ 知識を貯えておく。 | ⑩ 山岳保険に加入しておく。 |

安心登山とは、言葉をかえれば危機管理であろう。昨今、ツアー登山、ガイド登山での事故が増加している。主催する側に問題もあるが、参加する側にも問題がある。参加する側の問題として看過できないのが、危機管理意識の欠如だ。登山者として自立していないということである。これでは安心して登山のしようがない、安全な登山のしようがあるまい。自立した登山者の育成が急務である。日本の登山界に必要なのは、自立した登山者を育成できる登山インストラクターなのではあるまいか。